

## 資料紹介 佐伯千秋「現代っ子の言葉」

（『こどもの暮し』第一号、一九七五年）

富中 佑輔

### はじめに

佐伯千秋（一九二五～二〇〇九）は、昭和三〇年代から五〇年代にかけて活躍した少女小説の書き手である。代表作には小林幸子の主演でテレビドラマ化（一九六八年）された『青い太陽』をはじめとする雑誌連載小説や、第八回小学館児童文化賞を受賞した「燃えよ黄の花」（『女学生の友』一九五八年九月号）といった短篇作品がある。「燃えよ黄の花」は当時の少女小説の形式を維持しながらも、物語内容としては広島原爆投下により「黒こげ」となったヒロインに直面する若い人の少年を描くなど、同時代の児童文学状況においても異色な作品であった。

戦後『文藝首都』への投稿から出発し、「人々の胸に必ず根を持つしみぐ」とした愛情に伝はつてゆくやうな作品という理想を胸に<sup>1)</sup>、先輩作家であった瀬戸内晴美の紹介によって『少女クラブ』（講談社）、『少女の友』（実業之日本社）、『女学生の友』（小学館）などに原稿を持ち込み、一九五〇年代半ばよりプロ活動に入った。特に『女学生の友』では、それまで女子同士の愛情や家族愛が中心的テーマであった「少女小説」において、異性を扱う作品による読者獲得戦略を担う中心的な作家として見出され、以後、一九八〇年代初頭に至るまで、主に女子中高生を対象読者とした多くの小説を執筆

した。<sup>(2)</sup>

本稿では、ほとんど存在を知られることがなかった佐伯の随想「現代っ子の言葉」を紹介する。本随想は、当時東京都保谷市（現、西東京市）に存在した学習塾「青桐学園」が発行したミニコミ雑誌『ごどもの暮し』第一号（一九七五年）に発表された。巻末の「編集室から」によれば、同誌は一九七四年度に全四号が刊行された小冊子「青桐」の後身である。『ごどもの暮し』には雑誌コード等は付されていないが、神奈川県立神奈川近代文学館（那須辰造文庫）には第一号が公刊資料として所蔵されている。故に未発表原稿というわけではないが、一般の商業誌のように広く流通しなかったために、長らく存在が認知されてこなかった。なお文中に示す図版には、筆者自身が入手した資料を使用した。

## 一 青桐学園と佐伯千秋

### （一）青桐学園の理念と佐伯千秋の執筆姿勢

『ごどもの暮し』を発行した学習塾「青桐学園」は、一九五七（昭和32）年に開学し、一九八四（昭和59）年に閉学した。開学以来、「業者テスト」を一度も使用せず、授業で使用する教材も「すべてスタッフの手づくり」で通し、夏には山で合宿も行う「全人教育をめざすユニークな私塾」として地域住人から親しまれていたとい<sup>(3)</sup>う。

しかし一九七〇年代半ば以降、「押し寄せる受験戦争の波」によって塾生にも、「勉強そのものより受験を気にする子供が増え」、教室内では「悪質ないたずらや嫌がらせが続出」、保護者からも「塾は受験のことだけを考えてくれればいい」との声が上がるようになった。<sup>(4)</sup>「先生と呼ばれる身でありながら、子供たちにとって本当に大切なことは何もしてやれない」という無力感と、「受験塾に転進するぐらいなら消えた方がいい」という「芳賀義彰園長（五）<sup>(5)</sup>」の、乱塾時代<sup>(6)</sup>に対するささやかな抵抗」から、経営的には「順調」であった学園は理念的な理由によって閉鎖に踏み切られた。<sup>(5)</sup>

図1…『こどもの暮し』第一号（一九七五年七月）表紙

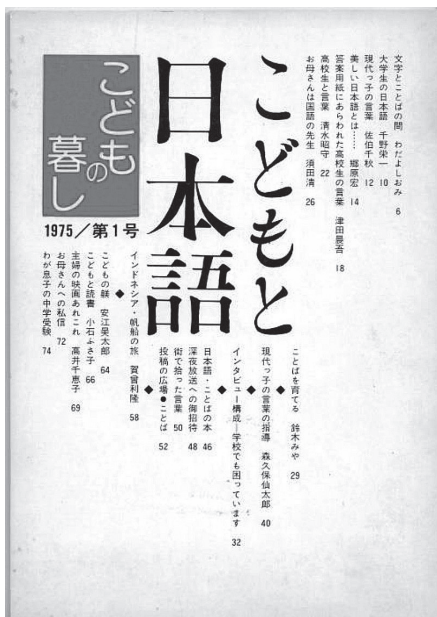
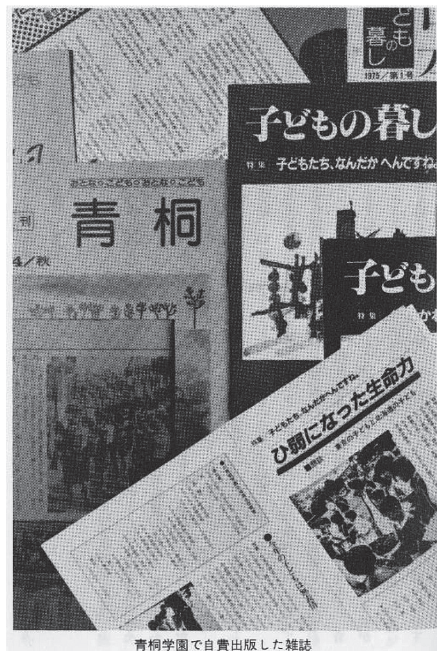


図2…「青桐学園で自費出版した雑誌」（中川越「砂に立つ子どもたち」）（稜北出版、一九八六年五月）七五頁より）



青桐学園の所在地は保谷市（現、西東京市保谷町）であったが、一九七五年当時、佐伯千秋も同じ地域に居宅を構えていた<sup>⑥</sup>。一九七五年七月時点で、一九五九年九月生まれの佐伯の長男は一五歳、一九六一年二月生まれの次男は一四歳であったことを考えると、佐伯の子ども達が青桐学園に入塾していた可能性も考えられる<sup>⑦</sup>。『こどもの暮し』だけでなく、『青桐』から寄稿している詩人の郷原宏（一九四二〜）も、早稲田大学在学中にアルバイトとして青桐学園で講師をしていたため<sup>⑧</sup>、同誌が塾関係者を中心に寄稿を募っていた一面が窺われる。

だが、もっとも考えられる理由としては、雑誌『こどもの暮し』の掲げた理念、ひいては青桐学園の教育理念に対する共感が、佐伯に潜在していたというものが挙げられる。

佐伯の結婚相手は、法律関係の公務員として勤めていた。結婚当時には未だ「裁判官や検事になるため、勉強中」であったが、翌年には勤務を開始していたようだ。配偶者の収入によって、佐伯は十分生活することが可能であったと推測できる。一九六七（昭和四二）年のインタビューでは、「まだ、子どもが赤ん坊の時、泣くと小説が書けなくなり、なんども小説をやめようと思った。が、一作品、三百通ぐらいくる、少女の手紙を見ると、やはり書かなくてはいけないと思った」と答えている。<sup>(9)</sup>「二度目の出発点となった受賞」（『児童文芸』一九七〇年六月号、一六卷一号）でも、出産と新生児の育児による疲労から「作家をやめたい。思いきり寝てみたい」と切望したが、小学館児童文化賞受賞の報が届いたのを機に、新たに書き続ける決意をしたことが述べられる。同文章には「あの秋に小学館賞を受けなかつたら、私は作家の道には背をむけていたかもしれない」とささげ記している。

つまり、佐伯の作品執筆を動機づけていたものは金銭的な要請ではなかった。これは書くことが経済的自立と固く結びついていた、吉屋信子をはじめとする戦前・戦時中の女性作家や、富島健夫や瀬戸内晴美（三谷晴美）といった佐伯と同時代の少女小説（なお、昭和四〇年ごろより、女子中高生向けの小説作品を「ジュニア小説」と呼称する慣例が一般化し始める）の書き手との大きな差異でもあった。特に昭和四〇年代、結婚後の佐伯の（ジュニア小説）は、中高生読者に対する作家的な使命感により執筆されたものであったといえる。わざわざ佐伯が「二度目の出発点」と位置付けていることから、結婚が執筆動機変化の契機であったことが窺われる。このことは、デビューした直後であった昭和三〇年ごろの自作に対する、自伝における次の表現からも推察することができる。「これは、文学といえるものではなかった。この時代、私は、パンのために書いたのである」。<sup>(10)</sup>なお、佐伯と類似する動機付けにより書き続けた少女小説／ジュニア小説作家として、三木澄子、津村節子（北原節子）を挙げることができる。

佐伯が随想の寄稿を承諾していることからは、『こどもの暮し』および青桐学園における「全人教育」という教育理念に對して共感があったことが見て取れる。本来、「全人教育」は大正期に小原国芳（一八八七～一九七七）が用いた語だが、

青桐学園の關係資料に小原への言及は見られない。ここでは受験勉強的な注入教育を目的化せず、あくまで生活指導を重視する立場から児童・生徒の人格形成を教育の目的に据えていたことを表現した語であろう。この考えに対する佐伯の共感<sup>13</sup>は、彼女をはじめ三木澄子や津村節子といった昭和四〇年代の〈ジュニア小説〉作家の創作行為、および文学史的な位置づけを考える際、決して見落としてはならない点である。

## (2) 佐伯千秋「現代つ子の言葉」をめぐって

一九七二年六月二八日の国語審議会第八〇回総会では、前文に「国語が平明で、的確で、美しく、豊かであることを望み、その際、国民全体が国語に関する意識を高め、国語を大切にすることを養うことが極めて重要であると考えた」(傍点引用者)と述べる建議「国語の教育と振興について」が審議されている。同建議内の「2 学校教育に関する事項」における「幼稚園・小学校・中学校・高等学校・高等学校では、幼児・児童・生徒を取り巻く学校内の言語環境を整え、適正な言語活動が行われるよう配慮する必要がある」という箇所は、一九七七(昭和52)年、七八(昭和53)年告示の小・中・高等学校学習指導要領「総則」に取り入れられる<sup>14</sup>。それに先行して、一九七三年六月一八日、「当用漢字音訓表」と「送り仮名の付け方」が内閣告示され、「戦後の国語政策上、昭和二十年代の当用漢字表の制定とそれに伴う表記法の一新以来、二度目の大きな改革」が行われている<sup>15</sup>。まず、『こともの暮し』創刊の時期は、このような政治が主導した戦後国語政策の大きな転換期であり、国語教育においても学校教育における国語科の重要性が説かれた時期であった。『こともの暮し』は都内の小・中・高等学校の教諭に「こともの」の「言葉」について評させたインタビュー七本を集め「インタビュー構成 学校でも困っています」として掲載するなど、「平明で、的確で、美しく、豊か」な国語を望む同時代状況と呼応していた。

あわせて一九七〇年代初頭は、理数分野を中心としたいわゆる「教育内容の現代化」を目的とした一九六八(昭和43)年、

六九（昭和44）年、七〇（昭和45）年告示版の改訂学習指導要領が次々と実施された時期である。中学校では一九七二（昭和47）年度より、高等学校では一九七三（昭和48）年度の第一学年より実施された。だが一九七〇年代における学習指導要領改訂は、負の面として高校・大学受験を激化させ、高校間の学力格差を広げた。『こどもの暮し』創刊は、新語・流行語に早くも「偏差値」が入り込んでいた<sup>14</sup>一九七五（昭和50）年という同時代の教育状況に対する、反動のひとつとしても理解することができるのである。

随想の題名にある「現代っ子」とは、もともと一九六三（昭和38）年の流行語であり、語の登場時期からみて「戦後生まれのティーンエイジャー」を指したと考えられる<sup>15</sup>。昭和二〇年代に当時の若年層を指した「アプレ」（アプレゲール）という流行語が、若者の中の「特に退廃的な、無責任で割り切った考えや行動をとる者」などに対し「非難の気持をこめて」使用されたのと同様に、「現代っ子」という言葉もまた「戦後生まれのティーンエイジャー」への揶揄的なニュアンスを包含している。この語彙選択は、『こどもの暮し』編集室（青桐学園）が「戦後生まれのティーンエイジャー」の言葉遣いを問題視していたことやはり関係していよう。

ではやはり佐伯もまた、「平明で、的確で、美しく、豊か」な国語が使用されることを望んでいたのかと言えば、「現代っ子の言葉に、カタカナまじりの新語が次々とびだすこと。礼儀正しい文章は書かないこと。それらについて、私は、目くじらたてるつもりはない」（傍点引用者）と述べ、『こどもの暮し』編集室の方針には一定の理解を示しながらも、現実の（現代っ子の言葉）自体については擁護する姿勢をみせている点は重要である。

佐伯は執筆の際、読者としての中高中生を常に意識していたと思われる。佐伯の創作活動が、特に読者からのファンレターと密接に関連していたことは、注（10）に示したインタビュー記事のほか、「ファンレターと女学生」（『マドモアゼル』一九六六（昭和41）年三月号）、「ジュニア小説のヒロインたち」（『文藝春秋』一九六七（昭和42）年八月号）、「わたしとジュニア小説」（『児童文芸』一九七六（昭和51）年九月号）といった各種の随想でも述べられている。詳しく述べるには稿を

改めなければならぬが、佐伯の作品（特に『ジュニア文芸』掲載作品）が読者からのファンレターに対する〈返答〉という文脈を強く読者に意識させていたことは、同時代的な（ジュニア小説）作家のなかでも際立った特徴であったと考えられる。もつとも典型的な例を挙げるならば、「遠い初恋」（『ジュニア文芸』一九六七年一〇月号）に付された「作者のこゝばにかえて」であろう。佐伯はそこで、「R子さん」とファンレターの送り主に二人称で呼びかける身振りをみせる。「R子さん。このものがたりが、あなたのお手紙への返事です」<sup>17</sup>。富島や諸星澄子、津村節子、赤松光夫など同時代作家の「作者のこゝば」を参照しても、多くは作品の狙いやテーマを述べることに終始している。

佐伯はどうか、中高生読者に対する意識を離れて書くことができなかつたものと思われる。随想「現代っ子の言葉」が、中高生の子をもつ親世代を讀者として想定していたことは、『こどもの暮し』という媒体の性質からも、また、冒頭付近の「彼等と接することも多いし、彼等から手紙もよくもらう」（傍点引用者）という人称選択からも明らかであろう。にも拘らず、佐伯は末尾に近づくにつれて、急速に、中高生の性格や生きることに対する態度という自らが語っていた内容を、想定していたはずの読者像から外れた「彼等」に対して、直接的に呼びかける際の表現を用いてしまふ。「自分を大切に、するならば、わが言葉、わが文章を、大切にしようじゃありませんか」（傍点引用者）、と。

もう一点、一九七〇年代に執筆されたという点を考慮するならば、「現代っ子の言葉」における「おヌシ、それでいいのかよ。ブッコロシだぞ。」や、「なヌ。貸してくんねエのかア。チェエーッ。しらけ。」といった、鍵括弧で括られた「現代っ子」の使用語として示されている、口語的なくだけた言葉遣い自体にも注目する必要があるだろう。<sup>18</sup>

佐伯は長篇デビュー作である『光と風のおとめたち』（一九五六年）では、女性作中人物のセリフ語尾に「わ」、「ですもの」、「のよ」、「ね」などの文末詞を付しており、「てよ。だわ言葉」と呼ばれる定型的な上流階級女性の口調で少女を描いていた。また同作では「マコちゃん」のように、「名前+ちゃん」という呼びかけを用いていた。しかし一九七〇年代になると、「現代っ子の言葉」に登場したような言葉遣いを駆使し、次のような独特の臨場感を持つ科白を作品に登場する少女に語らせ

ている。「ほら、こういうのがあつたじゃない。昭和元禄っ子のわれわれは幸福かつて、つてヤツ。胸にグシツときたじゃん。そいつが言っているようにさア。われわれ、戦争を知らないどころじゃない。生まれたときから、うっかり飲むものなら、ミルクはヒソミルクで殺されちゃう。ヤサイとニクはBHC。それならサカナにしたら、水銀サカナ。空気は毒ガスまじりだよ。太陽はオキシダント染め。おまけにゴミ戦争。戦いのまったただ中で育つてんのよ。わたしたちさア」<sup>16)</sup>。

シリアスな作品が多い佐伯だが、こうした軽薄ともいえる口語表現を自在に使用できたことが、本随想からは如実に窺える。佐伯が一九七〇年代に用いた口語表現の文体が、一九八〇年代以降に同ジャンルで活躍した水室冨子（一九五七～二〇〇八）らの軽妙な少女一人称文体と同質か否かの検証は一旦置くとしても、佐伯の文体は同時代に登場していた宇能鴻一郎や橋本治の軽妙な女性一人称文体とは、異なる成立過程と文化的背景を持っている。昭和四〇年代の〈ジュニア小説〉に現れた文体は、日本現代文学史の記述においてこれまで掬い上げられてこなかった、孤独な少女独白体であった。

## 二 掲載誌について

学習塾「青桐学園」の刊行物に関しては、中川越『砂に立つ子どもたち 消えた学習塾の証言』（稜北出版、一九八六年五月）に詳しい。特に注記なき場合、本章での以降の引用は『砂に立つ子どもたち 消えた学習塾の証言』に拠る。

『子どもの暮し』第一号（一九七五（昭和50）年七月二〇日）は、青桐学園内「子どもの暮し」編集室で編集・発行された。発行人は学園長である芳賀義彰。編集人は学園職員と思われる和田久。版型はA5。八〇頁ながら、定価は三〇〇円と高い。同年の『週刊少年ジャンプ』が定価一二〇円。ソフトカバー単行本の集英社コバルト・ブックスも、当時はすべて二〇〇円台である。発行部数は定かではないが、多くとも数千部程度と推定される。というのも、一九八二（昭和57）年七月に、同学園によるより小規模な同音タイトル雑誌『子どもの暮し』<sup>17)</sup>が創刊されているが、これは「A5版、二十八頁。印刷は



オフセットで、発行部数は千。対象読者は、小・中学生の子どもを持つ親。年四回の発行を目指すことにした。取材・編集は、芳賀さんと私（引用者注…中川越）が行なう（七四頁、傍点引用者）というものだったことによる。学園長の芳賀には「出版癖」があり「何回か公に向けた雑誌を創刊しては廃刊の憂き目に合っていた」（七四頁）という記述から、一九七五年創刊の『こどもの暮し』はこのうちの一冊と推測される。

小冊子『青桐』は、創刊号（一九六四（昭和39）年七月）、<sup>21</sup>第二号（一九六八（昭和43）年二月）、第三号（一九六八（昭和43）年六月）、第四号（一九六八（昭和43）年一月））が発行された。これらが『こどもの暮し』の前身かといえばそうではなく、以下に挙げる「復刊版」が前身となった冊子である。『復刊』青桐創刊号（一九七四（昭和49）年三月）、夏号（一九七四（昭和49）年六月）、第三号（一九七四（昭和49）年一月）、第四号（一九七五（昭和50）年一月）。このほかに同学園が発行したものととして、「父兄に当てた月一回のお知らせ」である『青桐学園だより』（六三頁）、職員会議の議事録が掲載された職員閲覧用らしい『桐の葉』（二三四頁）などがある。

『こどもの暮し』第一号（一九七五年）目次

文字と言葉の間	和田義臣	六〜九頁
大学生の日本語	千野栄一	十〜十一頁
現代っ子の言葉	佐伯千秋	十二〜十三頁
美しい日本語とは	郷原宏	十四〜十七頁
答案用紙にあらわれた高校生の言葉	津田晨吾	十八〜二十一頁
高校生と言葉	清水昭守	二十二〜二十五頁
お母さんは国語の先生	須田清	二十六〜二十八頁

ことばを育てる	鈴木みや	二十九～三十一頁
インタビュー構成 学校でも困っています	森久保仙太郎	三十二～三十九頁
現代っ子の言葉の指導	編集部	四十～四十五頁
日本語・ことばの本	編集部	四十六～四十七頁
深夜放送へのご招待	編集部	四十八～四十九頁
街でひろったことば	編集部	五十～五十一頁
投稿の広場・ことば	読者投稿	五十二～五十五頁
国語教育以前の僻地にひそむ諸問題	大内光	五十六～五十七頁
インドネシア 帆船の旅	賀曾利隆	五十八～六十三頁
ことばの蝶	安江昊太郎	六十四～六十五頁
ことばと読書	小石ふさ子	六十六～六十八頁
主婦の映画あれこれ	高井千恵子	六十九～七十一頁
お母さんへの私信	無記名	七十二～七十三頁
わが息子の中学受験(四) 最終回 一母親の手記	無記名	七十四～七十九頁
(編集室から)	Q (和田久)	八十頁

### 三 佐伯千秋「現代っ子のことば」本文

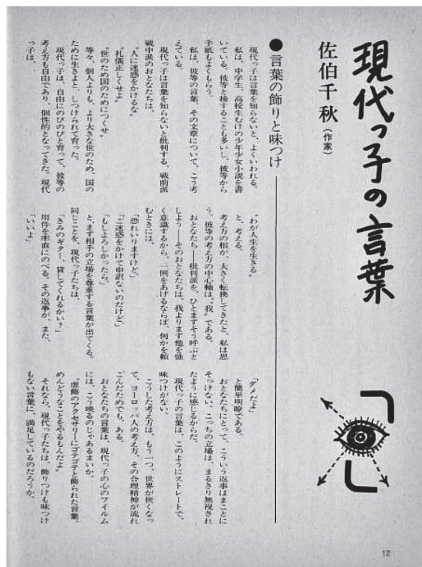


図3：佐伯千秋「現代っ子の言葉」  
『こどもの暮らし』  
(一九七五年)、開始一二頁

タイトル下のカットは「森脇栄」  
(奥付に拠る)。「写植・印刷」を行っ  
た「森脇写植印刷」の関係者と思  
われる。

#### 凡例

- ・ 原資料のレイアウトは図3を参照のこと。
- ・ 「」は改行を示す。
- ・ ( ) 内は注に相当し、本文レイアウトを再現するために必要な情報を補足している。

#### 「言葉の飾りと味つけ」(章タイトル、上揃え)(一二三頁)

現代っ子は言葉を知らないと、よくいわれる。／私は、中学生、高校生向けの少年少女小説を書いている。彼等と接す

ること多いし、彼等から手紙もよくもらう。／私は、彼等の言葉、その文章について、こう考えている。／現代っ子は言葉を知らないし批判する、戦前派戦中派のおとなたちは、／人に迷惑をかけるな。／礼儀正しくせよ。／世のため国のためにつくせ。／等々、個人よりも、より大きな世のため、国のために生きよと、しつけられて育った。／現代っ子は、自由にのびのびと育つて、彼等の考え方も自由であり、個性的となってきた。現代っ子は、／（以上一二頁上段）

わが人生を生きる。／と、考える。／考え方の根が、大きく転換してきたと、私は思う。彼等の考え方の中心軸は、我々である。／おとなたち——批判派を、ひとまずそう呼ぶでしょう——そのおとなたちは、我よりも他を強く意識するから、一例をあげるならば、何かを頼むときには、／「恐れ入りますけれど、」／「ご迷惑をかけて申し訳ないのだけど」／「もしよろしかったら」／と、まず相手の立場を尊重する言葉が出てくる。同じことを、現代っ子たちは、／「きみのギター、貸してくれるかい？」／用件を率直にのべる。その返事が、また、／「いいよ」／（以上一二頁中段）

「ダメだよ」／と簡潔明瞭である。／おとなたちにとつて、こういう返事はまことにそつけない。こつちの立場は、まさきり無視されたように感じるからだ。／現代っ子の言葉は、このようにストレートで、味つけがない。／こうした考え方は、もう一つ、世界が狭くなって、ヨーロッパ人の考え方、その合理精神が流れこんだためでも、ある。／おとなたちの言葉は、現代っ子の心のフィルムには、こう映るのじゃあるまいか。／虚飾のアクセサリーにゴテゴテと飾られた言葉。めんどろなことをやるもんだよ。／それなら、現代っ子たちは、飾りつけも味つけもない言葉に、満足しているのだろうか。（以上一二頁下段）（一二頁レイアウトは、一二文字×一六行×三段）

「ムードにのせる」（章タイトル、上揃え）（以下一三頁。一三頁レイアウトは、前半（一二文字×八行×三段）と後半（一二文字×一三行×三段）に分かれている）

さっきのギターの例を、もう一度。／「なヌ。貸してくンねエのかア。チェエーツ。しらけ。」／事務的な言葉のやりとりだけでは、やっぱり、彼等も不満足なのである。／友だちじゃないか、もうちいっと、なシとか考えてくれよ——。／

虚飾のアクセサリーをきらう彼等だが、その代わりに、彼等は、バックミュージックのような、／（以上二三頁上段）  
ムードを欲しがる。／ストレートない方を好む気持ちと、ムードを欲しがる気持ちとの矛盾が、照れ、となって現れているように、私は思う。／「おヌシ、それでいいのよ。ブッコロシだぞ。」／これは、借りたい欲望を、ストレートに表現できない、照れである。／友だちがいの無いヤツ（以上二三頁中段）

という、厳格ないい方はやらない。／「エンがなかったんだよ。ま、そういじけるなよ。」／これは、友だちがいのなかったバツの悪さへの、貸し方の照れである。／自分の心をむきだしに見せることには、抵抗がある。おとなたちは、儀礼的言葉でそれを包装し、現代っ子たちは、ムードという音波にのせているように、私には感じるのだが。（以上二三頁下段）

「●自分勝手はNO」（章タイトル、上揃え）

こういう現代っ子は、文章はへただ。それに、現代っ子は、わが心や意志を相手に伝えるのに、手紙を書くより、電話を使うことになってしまった。／さて、私は、現代っ子の友軍、じゃない。／照れを持っていて彼等に、私は、彼等の心が、ただ事務的、合理的にカサカサ乾いたものではなく、その心にうるほいのある緑地もみつける。／が、こういう手紙をもらうと、私はたまげてしまう。／「私は、いま窮地にいる。その事情はくわしく話せないが、窮地脱出のために、至急五万円を送金してほしい。／毎月、千円ずつ返金することを、確約する。（以上二三頁上段）

×月×日到着で、大至急、たのむ。その五万円が届かないときには、私は死ぬであろう」／要約すれば、こういう文章である。／「五万円など、見ず知らずのアンタサンには送れねえなア。死にたきや死んでもらう」／とは言えないわたしは、わたしの方こそ窮地に追いこまれてしまうのである。／照れもなければ、相手のことも全く考えない、身勝手な手紙である。／「こういう手紙が抵抗なく、あるいはおもしろ半分なのかもしれないが、書いて送れるということは、自由も、のびのびも通りこして、不遜である。／現代っ子の言葉に、カタカナまじりの新語が次々／（以上二三頁中段）

ととびだすこと。礼儀正しい文章は書かないこと。それらについて、私は、目くじらたてるつもりはない、が、／自由に

生きること、我を大切に生きること。／と、／傍若無人に生きること。／とのけじめは、つけてもらいたい。／わが自由と、わが人生を大切にすることは、相手の自由と、相手の人生への侵害者にもならないことだ。言葉や文章は、服装や行動と同じように、そのひとを表現する。自分を大切にするなら、わが言葉、わが文章を、大切にしようじゃありませんか。(以上一三頁下段)

## 注

- (1) 佐伯千賀子(佐伯千秋)『美貌の文学』『文藝首都』一九五一年一〇月・十一月合併号(文藝首都社)
- (2) 佐伯の作家的経歴に関しては、拙論「佐伯千秋伝記研究のための覚書」(『愛知淑徳大学国語国文』第四一号、愛知淑徳大学国文学会、二〇一八年三月)が現在もっとも纏まった資料である。なお同論を渡辺玲子氏(一九三五-)、広島ベンクラブ副会長)にお読みいただいたところ、以下の記述に対し誤りをご指摘いただいた。佐伯千秋の生家の住所が「現在の広島市中央区内」となっているが(一〇七頁)、正確には「広島市中区」である。広島市には「中央区」は存在しない(また、「令嬢界」(一〇八頁)は正しくは「令女界」)。渡辺氏は、佐伯千秋が計一七編の翻訳・創作童話を寄せた(渡辺氏調べ)教育雑誌『銀の鈴』(広島市、一九四六-四八)を調査する「ぎんのすず研究会」に所属されており、エッセイとして「少女小説作家・佐伯千秋のこと」(『ペン HIROSHIMA』二〇〇七年(下)(広島ベンクラブ機関誌)掲載↓「明日への旅のつれづれに」(溪水社、二〇一二年二月)収録)がある。「少女小説作家・佐伯千秋のこと」には、「結婚前の千秋の住いは三鷹にあつて、この家のはちに太宰治も住んだ所だという」との記述があり、やや内容が異なるものの、これを瀬戸内晴美の「友人が文学少女で、どうしても太宰の住んでいた家に住みたいということ、その家を買って住んでいたんです。(中略)友人は、太宰がいた時とだいたい同じ状態で住んでいると言っていました」という証言(「太宰治の愛と革命 瀬戸内寂聴氏に聞く(第3回)」(インタビュアー・構成・牧野立雄)『太宰治・第三号』洋々社、一九八七年七月)と照合すると、この「友人」こそ佐伯ではなかったか、という推測が成り立つ。もちろん太宰と佐伯の関係について明らかにすることは魅力的だが、佐伯・太宰両作品の影響関係が明らかになっていない現状では、あまり意味を持たないのも確かである。

- (3) 郷原宏「『木曜ワイド』 全人教育めざす塾 北の大地に夢再び」『読売新聞』一九八五(昭和60)年八月二十九日朝刊、一二一～一二三頁。リード文として「受験競争に抵抗、閉鎖」、「のびのび指導26年 3千人を送り出し」。なお「青桐学園」の命名者は、塾の近所に住んでいた吉村昭(中川越「私の東京物語」(5))『東京新聞』二〇一六年九月二六日朝刊、三〇頁。
- (4) 注(3)に示した郷原宏による記事より。引用部分は一二頁。
- (5) 注(4)と同じ。なお郷原による注(3)資料一二三頁では、青桐学園は閉鎖後、北海道洞爺湖に面した土地に移転し、「都会地の健康な中学生」を対象として、地元の中学校に通いながら「勉強だけでなく、農園で果物や野菜を作り、地元民との交流を図るなど、自然・社会教育にも力を入れる」新たな寄宿制学園「青桐の家」として再スタートする旨が記されている。
- (6) 佐伯は、結婚するまで三鷹市に居住していた。「わたしの履歴書」『別冊ジュニア文芸』2(春季)(一九六八年四月、小学館)をもとに結婚(一九五八年)後の居住地について纏めると、一九六〇年四月～一九六三年三月には福島県在住。「吾妻連峰、磐梯高原でよく遊んだ」(一九六一年二月～四月まで体調不良のため福島医科大学付属病院入院)。一九六三年四月～一九六六年三月には茨城県下妻市在住。一九六六年四月に東京に戻る。転居の理由は「公務員の主人の転任のため」(一九三頁)。「ジュニア文芸」創刊号(一九六七年一月、小学館)によると、茨城県から東京に移ったあと佐伯は「東京都北多摩郡保谷町本町4」に住んだ。『ジュニア文芸』一九六八年六月号では「東京都保谷市ひばりが丘1」とあるため、この間に少なくとも一度転居しているようだ。「青桐学園」の住所が「東京都保谷市本町2」(『子どもの暮』奥付に拠る)のため、「青桐学園」が佐伯の住んでいた地域に存在していたことは確かである。
- (7) この可能性については、本稿の内容の一部を含んだ文化創造学会(愛知淑徳大学大学院文化創造研究科主催)平成三〇年度第一回研究発表会(二〇一八(平成30)年九月二一日、於愛知淑徳大学長久手キャンパス)における研究発表「佐伯千秋の創作意識の変化——ジュニア小説からコバルト小説へ」の質疑応答の際、国文学科の竹内瑞穂准教授(現、教授)にご指摘いただいた。佐伯の子どもの生年月は、注(6)で参照した「わたしの履歴書」(一九六八)より。
- (8) 中川越『砂に立つ子どもたち消えた学習塾の証言』(稜北出版、一九八六年五月)、九頁および四五頁。
- (9) 無記名「作家画家のうわさ日記」『女学生の友』一九五八年八月号(小学館)、三二六頁。
- (10) 山本容朗「作家インタビュー／佐伯千秋先生の巻」『ジュニア文芸』創刊号(小学館、一九六七年一二月)。

- (11) 佐伯千秋「自伝私の歩いてきた道」『別冊ジュニア文芸』2（春季）（小学館、一九六八年四月）、傍点引用者。
- (12) 野村敏夫『国語政策の戦後史』（大修館書店、二〇〇六年一月）、一七六頁〜一八〇頁。
- (13) 無記名「まえがき」角川書店編『新しい国語の書き表し方』（角川書店、一九七三年八月）。
- (14) 「資料・ことしのおもなことがら（昭和50年）」『国語年鑑 昭和51年版（1976）』（国立国語研究所、一九七六年八月）、三六頁。
- (15) 泉麻人『泉麻人のなつかしい言葉の辞典』（三省堂、二〇〇三年一月）、七〇頁。
- (16) 『日本国語大辞典（第2版）』一あ〜いろこ（小学館、二〇〇三年一月）。
- (17) このような手法が選択された背景には、一九六〇年代〜七〇年代がペン・フレンド（文通友達）の時代であった（『ジュニア文芸』などにペン・フレンド募集のコナーが存在した）ことも関連しているよう。〈ジュニア小説〉の読者は作家からの返信を期待し、作家宛／編集部宛にファンレターを送る。とくに佐伯による昭和四〇年代の〈ジュニア小説〉は、読者にとって自分のことが描かれているかもしれない作品であり、直接的に自分には関係せずとも、少なくとも自分と近い境遇の中学生・高等学校生の手によるレターがもたっていることを感じさせ、その内容をまるで我がことのように受け取らせたことだろう。昭和四〇年代の佐伯作品は、ペン・フレンド文化により育まれた文芸でもある。
- (18) 泉麻人『泉麻人のなつかしい言葉の辞典』（二〇〇三年）によれば、「ちえっ」とは、「さほどいら立ったりキレたりしているわけではなく、ちよつとしたハズミというか、軽い反発心を訴えるときの、飾り言葉」のような意識で「発語され、昭和三十年代後半頃の若者（現代っ子）を表現する際の常套句として映画やドラマで多発され」ていたという。泉が例示している「ちえっ、しけてんな」「ちえっ、しよつてらあ」などの石原裕次郎や浜田光夫が映像作品で用いていた言葉と比べても、佐伯の「なヌ。貸してくんねエのかア。チェエーッ。しらけ。」が、さらにくだけた口語であることに注目しておきたい。
- (19) 佐伯千秋「素足の青春」（一九七二年）に集英社単行本。初出不詳。引用は集英社文庫版（一九七六年八月）より。
- (20) 西東京市ひばりが丘図書館に所蔵（ZOLのみ）。同館資料検索「資料詳細」に拠れば「出版社…保谷あおざり書店」。
- (21) 『砂に立つ子どもたち 消えた学習塾の証言』に記述はないが、小倉豊文「宮澤賢治研究文献目録（第二集）」『校本宮澤賢治全集 資料第二（宮澤賢治研究Ⅱ）』（筑摩書房、一九八三年一月）に、郷原宏の論考「宮澤賢治のこと」の発表誌とし



て書誌情報が記載されている。

(22) 『砂に立つ子どもたち 消えた学習塾の証言』に第四号の記述はないが、「〈編集室から〉』『こどもの暮』』第一号（一九七五年七月）に「昨年度四号まで発行しました」とあるため存在が推測される。

〈付記〉

本稿は、筆者が二〇一九（平成31）年一月に愛知淑徳大学大学院文化創造研究科文化創造専攻国文学領域（現、国文学専修）に提出・受理された修士論文「〈ジュニア小説〉作家・佐伯千秋の〈真実〉」（主査・小倉斉、副査・吉田竜也、酒井晶代）第二章「佐伯千秋の〈ジュニア小説〉における、カジュアルな口語表現と一人称の語り手について」の一部を基に、追調査の結果を踏まえて書き下ろされたものである。なお小冊子『青桐』<sup>あおきり</sup>（副題…こどもの本あおぎり）は、二〇二二年三月現在所蔵館を確認できなかった。なおまた、佐伯千秋の著作権継承者を捜しています。お心当たりのある方は、どうか筆者宛にご連絡下さい。

（文化創造研究科国文学専修博士後期課程二年）

